天草の旅・・・キリシタンの海

春たけなわの 4 月 21 日～24 日にかけ天草を訪ねた。昨年キリシタンの足跡の色濃い五島、長崎を回ったのでその続編と言っていいかもしれない。

熊本まで新幹線「さくら」で 3 時間半、駅前から本渡行きのバスに乗り込む。三角半島を突き抜けると天草諸島に入るが今は天草五橋でつながっているので交通の便は思ったより良い。ここまで来ると有明海とそれを隔てて島原半島の雲仙岳の雄大な姿が右手に見えてくる。島原半島の南端近くにはかつて訪れたことのある原城址があるはずだが肉眼では確認できない。そこは 1637 年の島原・天草の乱（一揆）で最後の激戦地となった所である。島原と天草は指呼の間にあり、当時はキリシタンの集住地であっていわば有明海はキリシタンの内海であった。間に浮かぶ湯島に「談合島」という別名があるのは一揆の計画がこの島で立てられたことによる。このように人的交流も多かったが自然災害も連動する運命にあった。「島原大変肥後迷惑」という言葉があるが、これは江戸時代に雲仙岳の噴火により山が崩壊し、島原だけでなく熊本、天草に大津波が押し寄せて 1 万 5 千人もの人が亡くなった災害のことを言う。

雲仙岳を眺めながら大矢野島、天草上島を経て下島の玄関口本渡に到着し、2 泊の宿をとる。ホテルの目の前には上島と下島を隔てる海峡が横たわるが、淀川ほどの広さもないので上島の山もすぐ間近に見える。それでもやはり海なので夕方になると魚がピョンピョン飛び跳ねているのが楽しい。

翌日午前中に市街地背後の丘、かつて本渡城がありキリシタン城主だった天草氏をやはりキリシタン大名の小西行長が加藤清正の力を借りて攻め滅ぼしたところで、女性も含め多くのキリシタンが殺された。その場所に天草キリシタン館があった。館の前には有明海を見つめる天草四郎の像があるように、展示の中心は島原・天草一揆である。島原城そして天草の富岡城を包囲しながら攻め落とせなかった一揆勢に対し、幕府挙げての反撃で一揆側は原城に籠城することになる。島原半島南部、天草大矢野島、天草上島からは村ぐるみで参戦したところが多く幕府側と 3 か月にわたる攻防戦を繰り広げることになる。しかし結局力及ばず、幕府側の総攻撃でついに落城、立てこもっていた 3 万 7 千人ともいわれる人が皆殺しにされたのである。バスで本渡に向かう道筋でカトリック教会を見ることがなかったのはおそらくこの地域のキリシタンは全滅し、潜伏キリシタンとして残りえなかったからなのだろう。世界遺産になった潜伏キリシタン集落も一揆に加わらなかった長崎西部、天草南部にあることもよくわかる。

午後は天草下島の南部へ。世界遺産に指定された崎津集落はじめ潜伏キリシタンが多かったところである。禁制下の江戸後期に天草崩れという事件が崎津や大江、今福などで発生し数千人の人が取り調べを受けたが、キリシタンとしてではなく「異宗」信仰者として踏絵を改めて踏ませるだけの処分で終わっている。幕府側もおそらく彼らがキリシタンであることを薄々感じつつ形式的な審査で終わっているのは、彼らが積極的にキリシタンであることを主張しない限りは穏便に済ます方がいいと思ったのだろう。

崎津教会

崎津は大きく入り込んだ羊角湾に面する小さな漁村集落であるが、その中心にそびえる教会が目立つ印象的な風景だ。禁制が実質的に解かれた後、崎津の潜伏キリシタンたちはカトリックに復帰した。そして踏絵が実施されていた庄屋の跡地に教会をたてた（祭壇の場所がちょうど踏絵の場所であったという）のは非常に象徴的である。隣村の大江集落もカトリックに復帰し丘の上に立つ大江教会は見どころとなっているが、崎津から内陸に入った今福集落はカトリックに戻らず明治以降も「カクレキリシタン」としてカトリックの形式からかなり異なってしまった旧来の信仰を維持した。しかし長崎も同じであるが、「カクレキリシタン」は信仰を受け継ぐ後継者が育たず消滅しつつあるということだ。

天草をバスで走っていて説明されたのだが、家の玄関に正月でもないのにしめ縄を飾っているところが多い。これはしめ縄を飾っておけばキリシタンと疑われないだろうと非キリシタンが始めたのをキリシタンたちも活用したのだという。禁制が解かれた後、キリシタンたちはしめ縄を飾らなくなったので今も飾っている家は少なくともキリシタンでないと推定できるという。

富岡は天草でも最も長崎に近い所にある。一揆当時、天草を支配していた唐津藩の城があった。城跡がある海に突き出た山からは富岡の町を見渡せるが、山から続く狭い砂州の上に町がつくられ、天草下島につながっている。ちょうど函館の町を小さくしたような非常に景色のいいところだ。この富岡城を包囲し、二度にわたる攻撃でも落とせなかった一揆勢は、近くの海岸から島原の原城に移動するが、そこには「天草四郎乗船の地」という碑もある。この城が落城していたらどうなっていただろうかという思いはあるが、おそらく当時の幕府との力関係からすれば結局は壊滅させられたであろうことは想像せざるを得ない。城内にある資料館はコロナ対策として町民以外は入場できなかった。富岡城の攻防をもう少し知りたかったのに残念。

富岡城からの眺め

富岡港から雲仙岳を右手に見ながら天草灘を突っ切り、長崎半島の付け根、茂木へ。ここは大粒の茂木ビワの特産地で有名だが今は長崎市の一部となっており、山を越えれば港

を抱く長崎の町が見えてくる。大浦天主堂と 26 聖人殉教記念碑及び記念館を見るために長崎経由の帰路を取ったわけである。

世界遺産大浦天主堂は昨年来た時にはコロナで入場停止となっていたので再訪となった。江戸時代の長い禁教から歴史的な「信徒発見」となった舞台でぜひ見ておきたかった。堂内の厳粛な雰囲気の中、祭壇の側面にはこの教会が捧げられた 26 聖人の処刑を描いた絵がかけられ、祭壇横には信徒発見の契機となったマリア像がある。しかしコロナは第 4 波に入りつつあり、大浦天主堂も 2 日後にはまた閉鎖されるというあわただしい時期だった。

長崎市街を挟んだ北の丘に 26 聖人の処刑地西坂があり、今はビルで見にくいが大浦天主堂と向かい合う位置にある。1597 年秀吉の弾圧で摘発され、京都・大坂から 1 か月かけて徒歩で長崎まで連れてこられ、ここで殉教したのである。26 聖人にとってはキリスト処刑のゴルゴタの丘を連想させる土地であったのだろうか、記念碑には誇りを持って殉教に臨んだ彼らの姿が表現されている。1862 年にはバチカンから「聖人」として顕彰され今はカトリックの聖地となって、長崎来訪のローマ教皇も訪れている。記念碑の後ろに記念館があり、26 聖人及び日本のキリシタンの苦難と栄光の歴史を知ることができる。（土代　武）